

ノウサギの被害に関する研究 (IV)

—— ヒノキ造林地での被害分布型 (第2報) ——

鹿児島県林業試験場 谷口 明

前報¹⁾では植栽から1年を経過したヒノキ造林地における被害発生分布型を報告したが、今回は植栽当年の被害発生分布型を報告する。

調査地と分布図の作製

調査地は前論文(Ⅲ)中の薩摩郡入来町滝の迫の調査

地に同じである。まず新植地8.76haのほぼ中央部に調査地0.27haを設け、地形図をコンパス測量で作製し、調査地内の全立木を無被害木と被害木別に図上にプロットした。なお、図上の斜線部は地ごしらえの際の棚づみである。

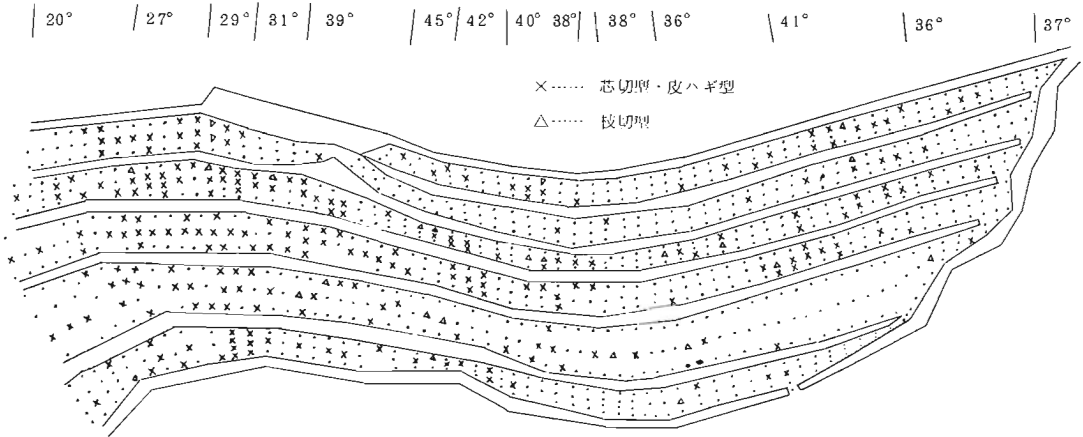


図-1 被害分布図 (1ヶ月間)

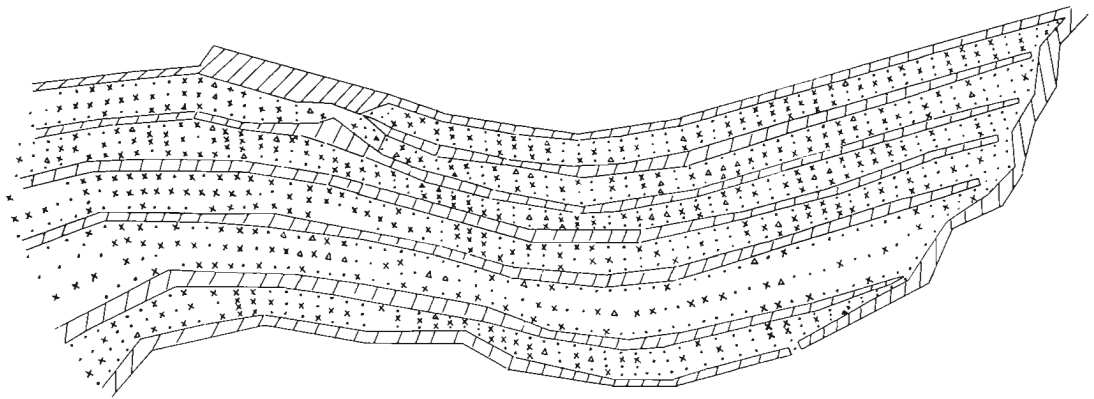


図-2 被害分布図 (1年間)



図-3 I_δ 曲 線

分析方法と結果

解析は植栽後1ヶ月間と1年間の被害についておこなった。月間の被害分布は図-1、年間の被害分布は図-2に示した。分布図から前報¹⁾と同じ処理法によりI_δ指数を算出し、I_δ曲線を図-3に示した。

植栽後1ヶ月間の被害はI_δ曲線から大集団をもつ集中分布で、集団内の分布は一様分布である場合のカーブに適合するようである。

植栽後1年間の被害はI_δ指数がすべて1に近い値で、I_δ曲線は直線近く、ラダム分布と考えられる。20本単位についてランダム分布の数学的モデルであるポアソン分布への適合性を検討したが、高い適合性が得られた。

1ヶ月毎に12回被害調査をしたうち、4回にノウサギが1頭ずつ柵組み内から飛び出すシーンが見られた。

4頭のうち2頭は明らかに幼獣(500g)と亜成獣であり、柵組みがノウサギの隠れ場として利用されると同時に、繁殖地としても利用されるものと考えられる。

以上のことから、柵組み地ごしらえ造林地における新植地でのノウサギ被害は、ノウサギの進入当初はある程度集中した被害として認められるが、柵組みを随時隠れ場として利用し、常に造林地内に定住できるため、年間をとおした場合、被害の分布がランダムになるものと思える。

ま と め

ノウサギ被害の発生する柵組み地ごしらえヒノキ造林地はすべての植栽木が加害される可能性を有する。

引 用 文 献

- (1) 谷口明：日林九支研論，30，277～278，1977